
ポケモン不思議のダンジョン 意志を遂げる者

慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 意志を遂げる者

【Nコード】

N0274Y

【作者名】

慎

【あらすじ】

目覚めたら森だった。どういうことだ、とピカチュウは自分に問いかける。誰も答えてくれなかった。不意に気づく。すぐそばに誰かいた。臆病者のそいつとひよんなことから探検隊を組むことになり。そして冒険は始まるのだ（仮あらすじ）

ポケダンベースですが、かなり邪道な話になります。気を付けてください。

0 Prologue

季節は終わりに差し掛かった秋。

場所は、世界の極東に位置する、天をつくかのような山が争うように連なる大山脈。そのふもとの鬱蒼とした森。そこに二人はいた。

幾層に積もった落ち葉の上に身体を横たえて、ブラツキーがぶかぶかと宙に浮かんだ一人の幼いジュペッタが、木の枝に吊るされた麻袋を叩いたり、蹴ったりするさまを見ていた。その顔はお世辞にも機嫌がいいとは言えない。

ジュペッタが遊びはじめてからそう時間もたたない内に、眉間にしわを寄せたブラツキーが「やめろよ」と低い声で言った。それにジュペッタが不思議そうな顔で振り返る。

「どうして」

「どうしてって、お前」ブラツキーは呆れた面持ちだ。「よくこんな時に遊んでられるな。全く呆れるよ。子は親に似るっていうが、弟子も師匠に似るんじゃないかねえの。本当、お前はお前の師匠に似ている。見ていて気持ち悪くなるところとか、本当にな」

「ありがとう」ジュペッタがにっこりと笑った。

「褒めてないから。腹立つところもそっくりだ」

眉間にさらにしわを寄せて、それから腰を上げたブラツキーはジュペッタを呼び寄せた。「ちよいこっち来い」

素直にジュペッタはブラツキーのそばへいく。

「真面目な話をしようぜ」ブラツキーはずいとジュペッタに顔を寄せた。「今、あんな用済みで遊んでる暇はないんだよ。なあ、わかってるだろう。俺たちの仕事はまだ終わってないんだよ。なあ。な

あ。なあ。わかるだろう？ この救い用のない、くそつたれのクソガキ」
ジユペッタがにっこりと笑った。「よくわからないよ」
「死ね」

苛立った声でブラツキーが最悪の言葉をもって、ジユペッタを罵倒した。しかしジユペッタ自身はふわふわと何処か現実味のない声で可笑しそうに笑うだけで、その子供特有のキーの高い笑い声は余計にブラツキーを苛立たせた。

これだから子供は、と彼は小さな舌打ちを溢し、全く脈絡なくジユペッタに襲いかかった。

地面に積もった落ち葉が、ひやりとした秋の空気の中に舞い上がった。

視界がひっくりかえって、揺れる木立を背負ったブラツキーに前足で首元を押さえつけられても、ジユペッタは相変わらず可笑しそうに笑うばかりだった。

しまいには「どおしたの？」とあの高い、ブラツキーにとっては耳障り極まりない声でブラツキーに問いかける始末だ。薄気味悪い、とブラツキーは表情には出さずに思った。

「どうしたこうしたもねえよ。仕事再開させるぞ」声には怒気が混じっていた。

ジユペッタが小首を傾げた。「まだだめだよ」

「だめだあ？ ……ふざけんじゃねつつうの」ブラツキーはまた舌打ちをした。「ふざけんじゃねえよ」

前足に力を込めた分だけジユペッタの身体は腐葉土にずぶずぶと沈み込んだ。しかしそれでも子供は「あはは」と笑うばかりで、ブラツキーの苛立ちを着実に限界量に導いていった。

「何笑ってんだ。おい。おい。おい。このクソガキ、攻撃されてるんだぞ。気は確かか？」ブラッキーは口をへの字に曲げた。「いや、確かなわけ無いよな。師弟そろって気の触れた、くそつたれどもめ」

唐突にジュペッタの口元が弧の形に曲がった。

ブラッキーの雑言などは聞いてすらいなかった。ジュペッタは違うものを見ていた。違うものを見て、笑っていた。

しかしそれを見てついにブラッキーの堪忍袋の緒が切れた。小馬鹿にされたと思っただのだ。

「仕事！」怒りのままに叫ぶ。「やる気あんのかよ！！」

瞬間、ブラッキーの身体が吹き飛ばす。

先程とは比較になら無いほどの落ち葉が、横に水平に吹き飛び、木の幹に叩きつけられた彼のあとを追った。

突如生まれた暴風がそこら一帯を蹂躪しはじめる。木々は暴風を生み出した荒々しい青い身体の暴君を前にまるでお辞儀をするかのようには身体を曲げ、ただでさえ少ない葉を手放しざるをえなくなった。軋んだ枝があげる悲鳴が辺りにこだまする。

半ば地面に埋まっていたジュペッタもただでは済まされなかった。ふ、と身体が浮かんだと思ったら景色が横に流れてる。けれどジュペッタは哀れなブラッキーのようには、叩きつけられることはなかった。

暴君が空中でジュペッタを捕まえたのだ。

「やる気」首の後ろに鈍い痛みを感じながら首をかしげて、ジュペッタは呟く。「もちろん、あるよ。師匠のやくにたちたいもの」

ジュペッタの首根っこをくわえて木の葉のように吹き飛ぶのを防いだ馬鹿みたいに大柄なポケモンはそのまま葉のなくなった剥き出しの地面に降り立つ。不運なことに着地地点にいた細木はバキバキと聞くに絶えない音をたてて折れた。

一方吹き飛ばされたブラッキーはというと。

「くそつたれめ」彼は呻いた。「このくそ野郎が」

そう罵倒しながらよろよろと、木に叩きつけられたときに痛めた肩を気にしながら彼は立ち上がった。

ブラッキーは怒っていた。が、しかし彼は先程ジュペッタにしたように襲いかりはしなかった。

流星の彼も、自分の何倍もの大きさの身体をした、その青いポケモン　ポーマンダに喧嘩を売るほど馬鹿ではなかったのだ。精々睨みあげることしかできない。

ブラッキーの睨みをポーマンダは気にすらしていなかった。彼は首を軽く動かして、くわえていたジュペッタを上に向かって放り投げた。落下地点はポーマンダの首の付け根だ。

そこに座り、首に頬を擦り寄せながら、ジュペッタはポーマンダに訊いた。

「狩りは、楽しかった？」

どろっとした赤いものが隙間に挟まってる歯をかちかちと鳴らして、ボーマンダはぐるると唸った。ジユペッタが機嫌良さそうに「ならよかった」と笑った。

そのやり取りにブラッキーは顔をしかめる。

いくつかの悪言を小声で呟いてたから、彼はジユペッタを見上げた。見上げることに強い苛立ちを覚えた。

「もう“いい”のかよ？」

「うん」

「じゃあとつとと行け！ 捕まえてこい！！」

瞬間、再度広がったボーマンダの両翼がブラッキーの視界を蝕んだ。大きな影が落とされる。

ブラッキーは舌打ちをして腹立ち紛れに、風で飛ばされないようボーマンダの首にしがみついているジユペッタに向けて叫んだ。

「あいつの姿は忘れてないよな！ 種族はピカチュウだぞ！ ピカチュウ！ 黄色い身体に赤いほっぺ！ それからギザギザの尻尾！ ！ 忘れるんじゃないぞ！！」それから、付け足すように。「今度こそ捕まえる！！」

叫び終える頃にはボーマンダはもう大分高いところにいた。

青い身体は空に溶けて見分けがつかない。翼の赤い点を目を細めて見上げながら「しくじるんじゃないぞ」とブラッキーは呟くように言った。

ジユペッタにだけに向けた言葉ではなかった。自分にも向けた言葉だった。仕事はブラッキーにも等しくあるのだ。

それを果たすために、ブラッキーは動き始めた。身軽に木に駆け登り、大分ジユペッタに痛め付けられた麻袋の縄をほどく。

どさりと地面に落ちた衝撃で目が覚めたらしい。木から降りて、麻袋に近づくと微かな、鈴を転がすような可愛らしい声の面影を残した苦しそうな掠れ声が聞こえた。

「……て……」

「……ん？」ブラッキーが耳を麻袋に近づける。今度はよく聞こえた。

「……に……げて……リフ……」

逃げて、リフ。

「……チツ」舌打ちをする。「あーあーあー、麻袋につめこまれて散々殴られて蹴られて、仲間の心配かよ。笑える。お涙頂戴の友情劇か。はっ、笑えるね。全く、本当に、笑えるったらありやしない。笑いすぎて涙が出そうだ。誰か、ハンカチーフを持ってないか」

自棄をおこしたように険のある言葉をばらまいて、ブラッキーは麻袋を器用に背中に背負った。その際に「くっだらねえ」と彼は呟いた。

「お前の仲間もどうせ、あのクソガキの人形がくわえてすぐに戻ってくるだろうよ。そしたら一緒に麻袋につめこんでやるよ。嬉しいだろ。なあ。なあ。なあ。おい、聞いているのかよ」

乱暴にブラッキーは背中をゆすったが、返事が返ってくることはな

かった。また気絶したのだろうか。

無理もないと思う。捕らえる前も、随分とジユベッタとポーマンダに痛めつけられていたのだから。

「つまんねえの」と彼は呟くように言った。

密生する木々の隙間に紛れて、そのさまを見ている影があった。

「可哀想に」

影は呟く。呟いて、くるりとその場で一回転して、自分の尻尾を捕まえて抱きつく。その体勢で哀れなものを見るような視線を、独言を絶えず呟きながら進むブラッキーに注いだ。
小さな笑い声はその口からこぼれた。

「どうせさあ、顔をあわせることもないだろうからさあ、今謝っておくけど」

影は愉快そうだった。

「ごめんね」

でもまあ、聞こえちゃいないか。そう言って、影はまた空中で回った。

くるり、次の瞬間には、その姿は消えてる。

そうして物語は主人公の与り知らぬところで、動き出し始めめるのだ。

0 Prologue (後書き)

あ、主人公でてない。しまった。

どうも、慎です。成分でいうと、残念100%でできてるただの残念なやつです。

更新停滞になる気しかしないですが、精一杯頑張る所存です。よろしくお願いします。

1 Missing girl

視界の果てまで青にしめられていた。

雲まで手を伸ばせば届きそうだと、ジュペッタは思った。もっとも雲に触れる、そこまで高くなれば地上を把握するのが難しくなるので昇りはしないが。今探してるのは極めて小さな者だ。

「黄色の身体、赤いほっぺ」ジュペッタは記憶を反芻しながら呟く。「あと、ぎざぎざの尻尾！」

探し者の特徴がそろつう。

はしゃいだ笑い声をあげて、ジュペッタはボーマンダの首に回した腕に力を込めた。

「バルト。ねえ、バルト、バルト」声には妙な熱がある。「黄色の身体、赤いほっぺ、ぎざぎざの尻尾！ そいつをさつさと捕まえてさあ、そうしたら、帰ろう。帰って、師匠に褒められて、そしたらきつといい気持ちなんだろうね」

ボーマンダは応えない。

それでもジュペッタは構わなかった。くすくすと笑いはじめた。

返事があるのか、ないのか、そんなことは全てどうでもいいことだった。

ボーマンダのバルトはジュペッタにとってはただの、自分の意のままに動く人形でしかなかったのだから。そしてジュペッタは玩具

を気にかける子供ではなかった。

光が瞼の裏側をしきりに刺激してくる。

なんだか「さっさと起きろよ」とせつつかれてるような気がして、しばらく赤子のようにぐずった後に、仕方なしに彼女は瞼を持ち上げた。

瞬間、開けた視界の中央にあつた太陽から放たれた強い光が真っ直ぐと目に飛び込んで、彼女は小さな悲鳴をあげて反射的にまた瞼をおろした。

「何なんだよもう……」

卑屈な声でぼそぼそと寝起きの掠れ声で文句を言いながらごろんと身体を横転させ、うつ伏せになる。そこで初めて自分が今まで仰向けに寝転がっていたことを知った。

顎の下にかさかさとした感触のものがあたって。

二度寝の世界にダイブしようにも、先ほど直視した太陽の残像が頭の中でちらついて、何だか落ち着かない。仕方なしにまた瞼を持ち上げて 「どこ？」 彼女は呟いた。

かさかさとした感触のものは落ち葉だった。大分色素の抜けた、何とも味気ない色をした落ち葉の絨毯の上に彼女はいた。

もぞもぞと首だけを動かして辺りを見渡せば、ここが森だと言う

ことがわかる。ただ木々は見てるだけで寒くなるような、裸同然の姿がほとんどだった。木の皮の色ばかり目立ってきつと今は秋なんだろうな、と彼女は推測した。正しかった。

情けなくその場にうつ伏せになったまま彼女はようやく頭を働かせはじめた。

「……えーとお」めんどくさそうな声音だった。「何でここにいるんだっけ」

確か、私は　そこまで思ったところで彼女は顔をしかめた。思い出せないのだ。眠りに落ちる直前のことが少しも　全くいっていいほど、思い出せないのだ。

暗い色をした霧が彼女の心の中で立ち込め始める。

「えーとお」と再度言うその声には切迫したものが入っていた。眉が寄せられ、表情が追い詰められた者のように強張っていく。目が揺れ始めた。

「確か、確か、確か　ああ、待てよ、確か……」彼女は呻いた。「だめだ、思い出せない」

何ということだ、と茫然としてる彼女をさらに強い驚愕が襲う。辺りのものを見たら思い出せるかもしれない、と身を起こそうと落ち葉に手をついた時だった。

「え……？」

声は不格好なほど揺れていた。

視界の下方に映る腕にぎよっとする。片方を目の前で持ってきて、彼女は「そんな」と呆気にとられた声をこぼした。

指をぎこちなく動かす。ぎこちなく閉じたり開いたり　その通りに動く、そのことが示すのはその手が間違いない彼女のものだということだ。

でもこんな指の短い、混じりけのない黄色の手が　私の手？

「いや」首を固い動作で振る。「いやいや、まさか、そんな馬鹿な。私の手はもっとこう　」

言いかけて口をつぐむ。自分の手のことすら思い出せないなんて、そんなことありえる？

「……っ」

バツと身を起こし、自分の身体のおちこちを見た。目の届くところのほしいが手と同じ、黄色。

足は短かった。胸が少し長い。気が狂ったかのように顔に手を這わせていたら、頬にあたるところで不意にビリビリとして、あわてて手を離れた。

頭の上に手を伸ばすと、細長い何かが掴めた。掴んで、目の前に引っ張ってきて、痛いことに気づく。それは身体の一部だったのだ。やはり黄色をした、先の方だけ黒いそれは耳だった。

そして一番の、驚くべきことは。

「尻尾……」今までで一番震えた声だった。「尻尾だって！　私に尻尾がある！」

そんなの　ありえない、と言おうとしていたのけれど、直前の記憶すらない奴がそんなこと断定できる？　彼女はまた口をつぐん

だ。
けれど自分はこんな姿 「こんな姿じゃなかったような気がする」

それは果たしてただの記憶喪失者の妄言か、それとも。心の動揺を示すかのように、彼女の隣で尻尾が揺れていた。根本の茶色いその尻尾にすがりつくものを求めるかのように、彼女は抱きつく。

その姿は彼女には知るよしもないことなのだが 間違えるのこののない、一人の小柄なピカチュウの姿だった。

「どっしり……」
ほとんど泣きそうな声でピカチュウは呟くように言う。

その時だった。

形容するなら「ボコッ」そんな感じの音が背後でしたのだ。

弾かれたように振り返ったピカチュウの黒い双眸に世にも奇妙な彼女にとってはそう感じられた 生物の姿が映る。

濃緑に少し青をかけたような色と柔らかいクリーム色の丸い頭の、鼻先が突き出た、目の細い それはヒノアラシだった。ピカチュウはやっぱりその事を知らなかったのだけれど。

ヒノアラシは頭しか地上に出していなかった。身体は地下だった。

彼は彼で驚いていた。

だって“穴を掘る”でつくった長いトンネルの先、頭を出した途端に黄色のポケモン。彼はピカチュウという種族を知らなかったに睨まれている。青天の霹靂である。思わず「ひ、ひい」と間拔けた声をこぼしてしまう。

しばらく二人は視線を合わせたままビクリとも動かなかった。風がその間を吹き抜ける。

その風が止んだとき、二人は同時に動き出していた。

「待てえええ！」

「来るなあああ！」

地を蹴って飛び出すピカチュウ、自分がつくった穴に、身を翻して再度潜り込むヒノアラシ。

どちらの行動も風のように速いものだった。しかし、ピカチュウの方が僅かに勝っていた。

「離せ！ 離せつてば！」

「あ、ちよつと！」ヒノアラシの片足を掴んだままピカチュウは叫んだ。「ちよつと！ 土をかけないでつてば あいた！」

もう片方の自由な足でヒノアラシは滅茶苦茶に穴の入り口の土を蹴る。手でも掻いて、土を押し出した。そうして出された土は遠慮なしにビシバシとピカチュウに直撃して 意外と痛いのだ。土の中に混じる小石がそう感じさせるのだろう。

「離せつてばあああ！！」ヒノアラシが絶叫する。

「ちょ　　いだっ、待って　　あだだ！　だから待ってっっ」

ことさら大きな石がガンツと鈍い音をたててピカチュウの頭に直撃した。それがスイッチだった。

ピカチュウの動きがピタリと止んで、ヒノアラシが訝ったその瞬間である。

「待ってって言うてんだろぅがぁぁぁあ！！」

その小柄な身体から出たとはとても思えない野太い怒声にヒノアラシは身を反射的に震わせた。怯んだ。その一瞬をピカチュウは見逃さない。

「フンツ！」とこちらもやはり野太い掛け声をあげて、ピカチュウはヒノアラシを引きずり出した。

さながら一本釣りのようにピカチュウに掴まれた足を支点に、ぐるんとヒノアラシの身体が宙を舞う　その直後に「ギャツ」彼は地面に叩きつけられる。何とも痛そうな悲鳴だった。

地面に引きずりだされたらだされたで、今度は這って逃げようとする。そんなヒノアラシの背中にまたがるように、素早くピカチュウが飛び乗った。

「ひっ！」という悲鳴がヒノアラシの口からこぼれた。

「な、なにするんだよ！　離せよ！　離せ！！」

「離せ離せってさっきからそればかり。人をお化けみたいに扱って」

「喋れるポケモンと出会ったら逃げろって言われてるんだよ！」

ピカチュウの耳がぴくりと動いた。

鼻もヒクヒクと動く。何だか焦げ臭くないか、あとなんかこいつ

の背中がやけに熱いような　気のせいだと思つことにした。
ヒノアラシはまだ暴れている。

しかしピカチュウが「傷つけたりとかはしないから」と言つと、その抵抗が一瞬止む。振り返りながらピカチュウを見上げる顔が「本当に？」と問う。ピカチュウは頷いた。

「まあ、こんなに小さい奴だし……」

小柄が幸いしたらしい。

かちんときたがそれを抑えて、ピカチュウはすっかり抵抗を止めたヒノアラシに話しかけた。いつのまにか匂いはなくなっていた。

「さっきのさ、喋れる、とかさ、逃げる、とかさ　「いや、引つ掛かるのはそこではない。」　ポケモン？」

舌にのせて押し出したは妙にざらついているように思えた。

強い違和感がピカチュウを襲つて、こめかみを押さえながら再び彼女はヒノアラシに問う。

「ポケモン。なにそれ」

「……冗談言つてる？」　ちらりとヒノアラシがピカチュウを見上げ、その頭をピカチュウに蹴飛ばされた。

「大真面目だから」

「いたっ！　何するんだよ！」

「うっさいなあ、もう。さつさと答えないともう一度蹴るよ」

「……ポケモンっていうのは」　渋々と彼は話しはじめた。「君のとだよ。あるいは、ぼく」

「……わお、哲学的な答えだね」

「冗談言ってる？」ピカチュウが再度蹴飛ばした。「……横暴な」
「話を続けて」

「どお説明していいかなんてわかんないって」ヒノアラシが眉尻を下げた。「だってポケモンって当たり前すぎて本当、どう説明していいか……ね、実はぼくのことからかってるんじゃないの？」
「……………」

また蹴飛ばされるかな、とヒノアラシは思ったけどピカチュウは微動だにしない。ひどいしかめっ面で、深い思考に気をとられているようだった。

「ポケモン……ねえ、私もポケモン？」

「そおなんじゃない？ 種族わかんないけど。ここら辺に住んでないでしょ？ そんなまっ黄色の身体、一度見たら忘れられないはずだし」

「つまりは大きなくりのことか……じゃあ、あなたもポケモン？」

「当たり前。ぼくはポケモンのヒノアラシという種族の」「言いかけて、口をつぐむ。「知らない人に名前教えちゃいけない言われてるんだった」

「誰に？」

「お母さん」

深いため息が少年の口からこぼれた。

「あと喋れるポケモンを見たら逃げろって……それも言われてるけど、さあ」

「何故逃げるの？」

「わかんない。けど、母さんはそう言うんだ。母さんの言うことはだいたいいつも正しい」ヒノアラシはそこでまたピカチュウを見上げた。「守れるかどうかは別として」

「悪かったね」

ようやくピカチュウはこのヒノアラシに対して申し訳なさを感じた。考えれば足を掴んで引きずり出すなんて少し、いや大分酷いことをしたような気も　「悪かったよ」言いながら、ピカチュウはヒノアラシから離れた。

「何だよ気持ち悪いなあ」急にしおらしくなったピカチュウを訝りながらもヒノアラシは身を起こし、身体についた落ち葉をはたいて落とした。

それを尻目にピカチュウは歩き出す。

ヒノアラシは自分のことを知らないと言った。なら、もうあまり用はない。辺りを歩き回って変な言い方だが、自分の手がかりを探ろうと思ったのだ。

記憶喪失ながらも他人に彼女は頼ろうとはしなかった。

一方、晴れて自由の身になったヒノアラシは穴の近くに戻りながら、その小さな背中を見つめた。変わった奴だったな、そう思いながら。けれどももう少し話したかったような気も、そう思いながら。

穴に上半身を突っ込んだ。けれどすぐさま身体は抜かれる。その手には引きずり出される際に手放してしまった擦りきれた革の鞆があつて、彼はそれを肩にかけると、ピカチュウを追いかけるために走りはじめた。

「何か用」

聞こえた落ち葉を蹴散らす足音に振り返ったピカチュウが、ヒノアラシを見て訝しそうな声でそう問う。

その隣に並びながらヒノアラシは「ねえ、どこに行くの」とそう問いかえした。ピカチュウが首を振った。

「別に。少し歩き回ろうかと思って」

「一人で？　ここら辺、すごく危ないよ。特に今は冬眠前のリングマたちの気がすごかったって」

「リングマ？　なにそれ」不思議そうな声がヒノアラシの話を遮った。

「そんなことも知らないの？　世間知らずだね」

ピカチュウが尻尾でヒノアラシを叩いた。

尻尾を動かすのは不思議な感じがしたけど、ちゃんと動いてくれた。

「きみさ、よく横暴って言われたい？」

「うっさいなあ。それで、答えてよ。リングマって何？」

「リングマっていうのはねえ……」

ヒノアラシが歩みを止めたので、必然的にピカチュウも止まる。

「こおーんな」言いながらヒノアラシが腕を左右に限界まで伸ばす。背中も逸らして、自分を大きくみせようとしている。「おっきな奴さ！　たぶん世界でいちばん大きいよ！」

「ふうん……」自分で訊いときながら気のない返事をするピカチュウ。

「あ、馬鹿にしてるでしょ。さてはリングマを知らないね、きみ。奴らはすごいんだよ。手の先にはすごく長く鋭い爪があって、どんな木もポケモンも奴らにかかったら」

「へえ」

ヒノアラシの話を最後まで聞かずに、ピカチュウは歩き始めてしまう。ヒノアラシが跳びはねながらそのあとを追った。

「ひどいなあ。最後まで聞いてよ！」

「ああうん、ごめんね。だけどあまり興味がなくなって……ていうかねえ、あなたなんでついてくるの？」

「え」ヒノアラシはまごついた。「そんなのぼくの自由だろ！」

「お母さんに私と話したらダメって言われたんですよ」

「バレなきやいいんだよ、結局。それに」ヒノアラシは呟くように言った。「喋れるポケモンと会う機会は少ないんだ。母さんはよくふもとの町に行くからそうでもないんだけど、ぼくは滅多に連れていってもらえないから……連れていってくれても、町の外で待たされるし」

「……」

「話したのは君が初めてかも。ああ、母さんを除いたら確かにそうだ。ねえ、ちょっとついていくのもダメ？」

「好きにしたら」

ぼそりとそう言うと、ヒノアラシは嬉しそうに笑った。出会いが会いだったけど、今二人の間を流れるのは友達のそれだ。

「それでさあ」「母親以外の話し相手が嬉しいのか、ヒノアラシがまた話を振ってくる。少し鬱陶しいような気もしたが、これでよかったのかもしれない。

一人になると自分が記憶喪失だというその事態に、呑まれそうだった。

「聞いてる？」ヒノアラシは少し不満げだ。
「聞いてるよ」とピカチュウは嘯く。

「きみ、何であんなところで寝てたの？」

「……」ピカチュウは答えに困った。「何でだろう」

「何でだろうって、自分のことでしょ」

「そうだけど……」

「じゃあさ、きみ、実はすごく強かったりする？」

「強いつて……」

「ここはね」ヒノアラシが説明をはじめた。「すごく危ないところなんだ」

「へえ」今度は興味をもつてることを示す相槌だ。

「馬鹿みたいに強いポケモンばかりが住んでるの。ほんと、母さんなしじゃとてもこの山から降りられる気がしないんだ」

「ああ、だから誰とも」

「無断で動いたら怒られるだけじゃなくて、本当に死ぬかもしれないからね。町に自分の力で降りることもできないんだ。だから誰とも話せない」

「そんなに……」

でも、なら何でそんな山の奥深くに暮らしてるのだろう？

その疑問をピカチュウに抱かせる間もなく、ヒノアラシは「だからさあ」と話を続けた。

「こんな危険なところに一人で寝てたきみは、もしかしたらすごく強いんじゃないかと」

「そうかな……」ピカチュウは落ち着かなさそうだった。「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「自分のことでしょ？」

「でもわからないよ」

その言葉の意味を読み取れず、ヒノアラシが首を傾げた。

「どづいつこと?」

ピカチュウはそれに答えることができない。自分でもわからないことを、どうして説明できようか。

「……じゃあ、わざを見せてよ、わざ。それでだいたい強さはわかる」「気まずい空気に耐えかねたように、ヒノアラシはそう言った。

「わざ?」

「あれ、言語の地方の差分かな……でもわざはわざだし、ほら、わざだよ!」

「わからないって」

わざ。

何かの技術のことを言ってるのだろうか。そう予測をつけるピカチュウにヒノアラシはとんでもないことを言う。

「こう、火をブワァーッと出したり、爪でズサズサーッとやって木切り裂いたり、岩砕いたり　あとさっき見せたあれ!“穴を掘る!”」

「……」

火をブワァーッと出したり、爪でズサズサーッとやって木切り裂いたり、岩砕いたり。

そして穴を掘るのだ。最後のだけ何だかやけに現実的だ。せつせとスコップを持って土を掘り返すヒノアラシの姿がピカチュウの脳裏に映る。

様子でピカチュウに通じてないことをヒノアラシは察したのだから。ヒノアラシが「仕方ないなあ」と言わんばかりに、実際に言って、両手をその場の地面についた。

「後ろにもものがあると危ないから」ということらしいが、ピカチュウにはさっぱりだ。

見てて、とヒノアラシはピカチュウに言う。それから離れて、とも。ピカチュウは大人しくそれに従った。

最初、数歩離れたところで何うヒノアラシに目立った変化はなかった。ただ出会い頭の乱闘の時のあの何かが焦げたような匂いが鼻をついて、ピカチュウは思わず辺りを見回した。

それを見てヒノアラシが困ったように笑った。

「ぼくはもうあまり強くないから出したい時にすぐに出せるわけじゃないんだ。半人前だからどうしても少し時間がかかる」

へえ。でも何が？

首を傾げるピカチュウの黒い両眼が、次の瞬間見開かれた。

「でたあ！」と歓声をあげる少年の背中から 火が吹き出ているのだ！

そう大きなものではないけど、けれど確かに火が、赤々と燃え盛る炎が 「なにこれ」ピカチュウは目をこすった。

目の前の光景が信じられない。しかしいくら擦ろうと、炎は変わらずにそこにあった。

やがて炎は尽きる。ヒノアラシが歩み寄ってきた。

「母さんは口からでも出せるんだけど、背中
の器官から口に火を持つてくるのは難しく
って、ぼくはまだ」「ヒノアラシがきよと
んとした。「どうしたの、そんな可笑しな
顔をして」

「え、あ、いや、でも、だって」

不明瞭な言葉ばかりが口をついて出てくる。
ヒノアラシは変わら
ずきよとんとする。

ピカチュウはなんとか言葉を喋ろうとする。
けれど、何を言っ
ていいか。あの小さな鮮烈な炎だけが脳裏を
ちらついて、口にまで意識が回らない。

背中から炎が吹き出たのだ。

信じられるか？ とピカチュウは自分に問う。
けれど確かに彼女は見た。なら信じるしかない。

けどあんな、だって、だって。有り得ない
じゃないか。けれど記憶を持ってない彼女は何
をもって炎を有り得ないか、それを説明
することができない。

ただ彼女は自身の心の奥にあった何か。言
葉にするなら何か、大きな“前提”があ
の炎に灰もなく燃やし尽くされたことを知
った。一瞬にして、彼女は彼女の世界をつ
くりかえられた。否応なしに。

前の彼女の世界はあの炎に焼き捨てれた
のだ。新しい世界の中で、彼女は孤独のた
だ中であつた。

「ねえ」ヒノアラシの声に心配が混ざった。
「本当に、大丈夫？」

具合が悪いならこの近くのぼくの家に」

「いや……大丈夫だよ」

かすれた声でピカチュウは答える。

彼女は急にこの少年が恐ろしくなった。数歩後ずさって、背中がトン、と木にぶつかる。

「本当に大丈夫？」と心配に顔を歪めたヒノアラシが近づいてくるが、手を振ってピカチュウはそれを止めた。

ビクリと身を震わせて、ヒノアラシは立ち止まった。

空気が固い。

前の気まずさなんか、可愛いものと思えるほどに。何が急にピカチュウを変えたのか全くわからないヒノアラシは落ち着かさなさげだ。

暗い眼差しでピカチュウはそんな彼を見ていた。

明るい会話に戻ろうと、ヒノアラシが彼女に話を振った。

「さっきのは“火の粉”。炎タイプのわざだよ。ぼくは炎タイプだからどうしても得意なものは炎タイプになっちゃうんだ。けど“穴を掘る”も地面タイプだけど結構使いやすくて」

知らない単語がポンポンと飛び出すその口が恐ろしかった。

先程までは知らない単語を聞いても笑っていられた。その余裕はもうない。

黒い双眸が揺れ始めた。

ヒノアラシはまだ喋っている。不穏な空気を吹き飛ばそうと、けれどそれは空回って、余計にピカチュウを追い詰めただけだった。

ピカチュウにはもうその言葉は呪詛のようにしか聞こえない。実際はそんなことは全くなかったのだけれど。ヒノアラシは真剣にピカチュウを心配していた。

けれど　でも、怖くて。

「もう何も言わないで」

その言葉にピタリとヒノアラシは動きを止めた。

呪いの言葉にしか聞こえなかった言葉の奔流が止んで、ほっとするだろうと思ったのに　ヒノアラシの顔を見た時、ピカチュウの胸に広がったのはただの後悔だった。そしてヒノアラシの胸に広がったのも、また。

傷つけた。

あんなこと言わなければよかった。

嫌われた。

初めて友達になれたかもしれないのに。

じんわりと胸に広がる暗い色の感情に打ちひしがれる二人を
遙か上空から見つめる一つの影があった。

「黄色の身体、赤いほっぺ」ジュペッタは記憶を反芻しながら呟く。
「あと、ぎざぎざの尻尾！」

吹き飛ばされないうつ、ボーマンダのバルトの首に掴まったジュ
ペッタの機嫌は最高潮だった。
だった。

だってつい今、探している者が見つかったのだ。子供らしい直情
的な喜びを顔中に浮かべてジュペッタは笑った。

黄色の身体、赤いほっぺ、ぎざぎざの尻尾　ピカチュウの特徴。

「見つけた」

大きな嵐が始まるうとしていた。

1 missing girl (後書き)

あ、主人公とパートナーの名前出してない。しま(ry

くっ…しかし長編って難しい。単発ばっか書いてる奴なので苦労の連続です。他の作家様方まじすばらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274y/>

ポケモン不思議のダンジョン 意志を遂げる者

2011年11月6日03時12分発行